第二講　法学部

次の文章を読んで、あとの問に答えよ（**問八**は不要）。

かくて月日もはかなく過ぎて、春にもなりぬ。世の中ものどかなる様なれば、和歌所の人々（注1）、少々参り合はれたりしかば、「今は世の花も、盛り過ぎぬらむ」と、「大内（注2）の花、散らぬさきに」と、やがて引き連れて、車二両に込み乗りてまかれり。もとより群れゐたる大徳、或は由ばめる女房も、多くさまよひありく。[1]この人々と見て、いかでか心遣ひもせざらむ。うなづきささめきて、歌どもこなたかなたより持て集ふ。御階の程に円居して、連歌などし侍りて、やがておのおの歌を詠む。花一枝折りて、歌を置く。

中将定家の詠まれたりし、

[2]年を経てみゆきに慣れし花の蔭ふりゆく身をもあはれとや思ふ

はらからに法橋最栄、いざなひ具せられて侍りし、

梢にはなほ大内の山桜風もあだには思はざりけり

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

「これらは良し」など、その座の人々申し合へりしかば、取り分きて記し侍るなり。

さて帰りなむとするに、女房のさしよりて、「花一枝折りて給へ。知らぬ人をば御所守の諌め侍り」と申すは、中原宗安申しかけし、

　　折れと言はばいともかしこし桜花飽かぬ匂ひを袖に[a]<u>任せよ</u>

返しも侍りしを、忘れにし口惜しさよ。弥生の十日余りの月はなやかに差し出でて、まかり帰る。「[3]<u>たつ事やすき</u>」と誰も誰も思へるに、かごとがましきまで、花はこぼれ落つ。月花門のほとりに、笙の笛を吹き鳴らしたりしかば、笛を取り出でて吹き合はす。少将雅経の篳篥吹き置く。唱歌して、建春門より出でて、待賢門よりおのがじし名残惜しみてまかり帰りにき。

かく花見に引き連れてまかりぬるよしを聞こしめして、夜更くる程に帰り参りたりしかば、[b]<u>召し</u>寄せて、「誰れ誰れか、心とまる歌詠めりつる」など、問はせ給ふ。この中将の「みゆきに慣れし」と詠めりつる歌を語り申す。「誘はれざりけるこそ、口惜し［A］」とて、笑はせ給ふ。「うらやまし。明日行きて、ご覧ず［B］」と仰せあれば、さも参りぬべききはの人々に、夢見せに遣はす。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

次の日の午の時ばかり、御幸あり。忍びて仰せありつれど、こなたかなたより、馬・車多く行き違ふは、追ひ追ひ人々の参るなるべし。げに、「軽軒[x]九陌の塵に馳す」と思ひ出づ。待賢門より入らせ給ふ。心もとなげにおぼしめし至れば、置路も遙かなる心地して、沓の声々もいそがはし。御幸なるを見て、もとより女房ども逃げ騒ぎあへるを、「とどめよ」と仰せあれば、まかりて言ひ掛く。「花ならばしばしＣ散りそ木の下を」、口に任せて指し事に[c]申したりしかば、「言はではありと効や無からむ」と言ひて、山吹を持たりしを[d]賜びたりし。

さて花下に人々近く召し寄せて、「むげに残り少なくなりにけり」とて、御硯・紙など召し寄す。各々歌つかまつるべきよし仰せあれば、人々に紙ども分かち賜ぶ。花一枝折りて、文台にして、各々歌を置く。其のたびの御製、

　天つ風しばし吹き閉じよ花桜雪と散りまがふ雲の通ひ路

かへらせ給ひしに、散りたる花を御硯の蓋に掻き集めて、摂政殿（注3）へ[e]参らせさせ給ひしに添へられたりし、

　今日だにも庭を盛りとうつる花消えずはありとも雪とかも見よ

この花を持たせて、三条坊門に渡らせ給ひしかば、参る。「ただ今、御院参」とて、御前・御随身、庭に並み立ちて侍りしを、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

[4]分け参りてこのよしを仲資朝臣もて啓し侍りしかば、出でさせ給ひて、御てづから取らせ給ふ。御返し、

　　誘はれぬ人の為とや残りけむ明日より先の花の白雪

とぞ、聞き侍りし。

（注１）和歌所の人々…後鳥羽院の命で、当時『新古今集』を編纂していた歌人たち。この文章の筆者である源家長も、その一人である。
（注２）大内…平安宮の内裏。花の名所。
（注３）摂政殿…藤原良経

問一　傍線部１「この人々と見て、いかでか心遣ひもせざらむ」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア　旧知の僧や女房たちが来ているのを見て、どうして何もせずにいられようか。
イ　花見に僧や女房たちが来ているのがわかって、どうして知らぬふりをしようか。
ウ　僧や女房たちと一緒に花を見て、どうして互いに気をつかわないことがあろうか。
エ　和歌所の歌人たちとわかって、どうして気持ちの準備をしないことがあろうか。
オ　新たに和歌所の人々が加わったので、どうして交遊しないことがあろうか。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二　傍線部２「年を経てみゆきに慣れし花の蔭ふりゆく身をもあはれとや思ふ」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア　何年もみゆきにお供をすることはなかったが、かつて見慣れた花に久しぶりに会って、それをあはれと思わないことがあろうか。
イ　久しぶりにみゆきのお供をしたのだが、見慣れていた花が、すっかり老いた私のことをあはれと思ってくれたことだよ。
ウ　幾年もみゆきをお迎えしている花よ、私もそのお供をして立ち慣れた花の蔭であるが、このまま老いていく私のことを、気の毒に思ってくれるか。
エ　数年前にみゆきがあって以来、顔なじみのこの花の蔭に立つのは久しぶりだが、花びらが雪のように降りかかるのを、気の毒に思っているだろうか。
オ　何年にもわたって毎年、みゆきの折には宮中の人々をお迎えするのに慣れた花よ、花びらが花蔭に雪のように散るのを、残念に思わないことがあろうか。

問三　空欄Ａ・Ｂに入る最も適切な語を、それぞれ次の中から一つ選べ。

ア　からむ　　イ　らむ　　ウ　けれ　　エ　なむ　　オ　べし

Ａ＝　　　　Ｂ＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問四　傍線部a・b・c・d・eは、それぞれ主語は誰か。最も適切な組み合わせを、次の中から一つ選べ。

ア　a―宗安　b―家長　c―定家　d―女房　e―歌人たち
イ　a―女房　b―後鳥羽院　c―家長　d―女房　e―後鳥羽院
ウ　a―女房　b―後鳥羽院　c―女房　d―後鳥羽院　e―歌人たち
エ　a―宗安　b―後鳥羽院　c―家長　d―歌人たち　e―家長
オ　a―女房　b―摂政殿　c―女房　d―後鳥羽院　e―歌人たち

問五　傍線部3「たつ事やすき」とは、ある古歌の一部であり、ここではその古歌をさしている。その古歌として、文脈上最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア　今日のみと春を思はぬ時だにもたつ事やすき花のかげかは
イ　あしがものおりゐる池の水波のたつ事やすき我が名なりけり
ウ　吹く風にたつ事やすきあだなみもあさきうらにはよするものかは
エ　花ならぬならの木かげもなつくればたつ事やすき夕まぐれかは
オ　ちりはてて花のかげなき木のもとにたつ事やすきなつごろもかな

問六　空欄Cには、ひらがな一字が入る。最も適切な語を記せ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問七　傍線部４「分け参りてこのよしを仲資朝臣もて啓し侍りしかば、出でさせ給ひて、御てづから取らせ給ふ」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア　随身が人々をかきわけて参り、これを仲資朝臣が持ってきて後鳥羽院に献上したところ、院が出ていらっしゃって、ご自身でお取りになった。

イ　摂政殿が後鳥羽院に参られて、仲資朝臣を介して院にお礼を申し上げたところ、院が出ていらっしゃって、摂政殿のお返事をご自身でお取りになった。

ウ　私（家長）は仲資朝臣を連れて、人々をかき分けて摂政殿にこのことをお知らせしたところ、すでに後鳥羽院のところへお出になっていて、ご自身でお取りになっていた。

エ　摂政殿が、後鳥羽院の御前の人々の間を通って参り、仲資朝臣が摂政殿にこの歌を献上した時、院が出ていらっしゃって、摂政殿の返歌をご自身でお取りになった。

オ　私（家長）は人々をかき分けて参上し、仲資朝臣を介して摂政殿にこのことを申し上げたところ、摂政殿が出ていらっしゃって、ご自身でお取りになった。

問八　傍線部Ｘ「九陌の塵」は、都の喧噪や都市の生活を象徴する語である。都の生活をテーマに詠じた次の南宋・陸游の漢詩（本設問では省略）を読み、あとの問に答えよ（省略）。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二講　復習問題

①『とはずがたり』よりも前に成立した作品を、次の中から一つ選べ。

イ　春雨物語　　ロ　太平記　　ハ　野ざらし紀行　　ニ　風姿花伝　　ホ　新古今和歌集

②『落窪物語』よりも前に成立した作品を、次の中から一つ選べ。

イ　菅家文草　　ロ　狭衣物語　　ハ　風姿花伝　　ニ　無名草子

③「おほかる野辺に」は、次に示す『古今和歌集』の小野美材の和歌の第二句である。

女郎花おほかる野辺に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ

この和歌を参考にして、本文中（本設問では省略）でこの句を口ずさんだ思いとして、最も適当なものを次の中から選べ。

イ　女性が多い所にやってくるとは、あなたももの好きですね
ロ　女性の多い宿に泊まってこそ、物語の男君としてふさわしいでしょう。
ハ　女性が多い所に長居したら浮気者の評判が立つから、帰りましょう。
ニ　せっかく女性の多い所に来たのですから、泊めて下さい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④「うち具しつつ」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　準備を整えながら　ロ　心の内を話しながら　ハ　供え物を持ちながら

ニ　連れ添いながら　ホ　ともに暮らしながら

⑤「行幸せさせたまへりし」の解釈として最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　伺わせなさった　ロ　お出かけなさった　ハ　お祈り申し上げた

ニ　お詫びさせなさった　ホ　お届けさせなさった

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【第二講】

〈模範解答〉

問一　エ　　問二　ウ　　問三　Ａ　ウ　　Ｂ　オ　　問四　イ　　問五　ア
問六　な　　問七　オ

〈現代語訳〉

こうして月日もあっけなく過ぎて、春にもなった。世の中も落ち着いた様子なので、和歌所の人々が、少しばかり参り合わせなさっていたので、「今頃はもう世間の桜の花も、きっと盛りを過ぎているだろう」と（いう話になり）、「内裏の桜の花を、散らない前に（見ておこう）」と（いうことで）、そのまま連れ立って、牛車二台に乗り込んで参りました。（内裏では、私たちが行く）以前から（花見のために）集まっていた僧や、あるいは趣深い様子をしている女房も、おおぜいあちこち歩きまわっている。（この僧や女房たちは）この（和歌所の）人々（が来た）とわかって、どうして気持ちの準備をしないことがあろうか（いや、皆こちらを気にしている）。うなずき合ったりささやき合ったりして、（それぞれ自作の）歌々をあちらこちらから持って集まって来る。（私たちは紫宸殿の南の）階段のあたりに丸い形に座って、連歌などをしまして、引き続きそれぞれ歌を詠む。桜の花を一枝折り取って、歌を添える。

中将定家が詠みなさった（歌は）、

年を経て…＝幾年も天皇のお出ましに慣れ親しんだ桜の花よ、私も（近衛司として）そのお出ましにお仕えして立ち慣れた花の蔭であるが、（このまま昇進もせずに）年老いてゆく私のことを、気の毒に思ってくれるか。

（私の）兄に法橋最栄（がいて、その最栄）が、誘われて連れられて来ていました（その最栄が詠んだ歌は）、

梢には…＝内裏の桜の梢にはまだ花がたくさん咲いている。（花を吹き散らす）風も（この内裏の桜のことは）いいかげんには思っていなかったのだなあ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

「これら（の歌）は良い」などと、その席の人々が口々に申していたので、特に書き記すのです。

そうして帰ろうとする時に、女房が（私たちに）近寄って、「桜の花を一枝折り取って下さい。（私のような）知らない人（が折り取ること）は内裏の番人が咎めるのです」と申すのは、（それに対して）中原宗安が詠みかけたのは、

　折れと言はば…＝（あなたが桜の花の枝を）折り取れと言うのなら、とても恐れ多い（ことなのでそうしてあげてもよいけれど、それよりも）飽きることのない桜の花の匂いを袖に染み込ませて行きなさいよ。

（女房からの）返歌もありましたが、忘れてしまったのは残念なことよ。旧暦三月の十日過ぎの月が明るく照り出して、（私たちは）帰ります。「立ち去りがたい」と誰も彼も思っていると、恨みがましいくらいに、桜の花は散り落ちる。月花門のそばで、（一行の一人が）笙の笛を吹き鳴らしたので、（私は）横笛を取り出して調子を合わせて吹く。少将雅経が篳篥を吹き添える。（その音色に合わせて）歌を歌って、建春門から出て、待賢門から各自それぞれに名残を惜しんで帰りました。

このように（私たちが）花見に連れだって参ったことを（後鳥羽院は）お聞きになって、（私が）夜が更ける頃に帰参したところ、（院は私を）お呼び寄せになって、「どんな人々が、心ひかれる歌を詠んでいたのか」などと、お尋ねになる。（私は）この中将定家が「みゆきに慣れし」と詠んでいた歌のことをお話し申し上げる。（院は）「誘われなかったのは、残念なことだ」とおっしゃって、お笑いになる。「うらやましいことだ。明日（内裏へ）行って、（桜の花を）見よう」とおっしゃるので、そのように（院のお花見のお供として）参上するのにふさわしい身分の人々に、吉報を知らせに（使者を）行かせる。

翌日の午前十二時頃、院はお出ましになる。（このお出ましは、院が）内々におっしゃったことであるが、あちらこちらから、馬や牛車が数多く行き来するのは、（院のお出ましのことを聞き伝えた人々が）次々に参上するのであろう。なるほど、「軽軒九陌の塵に馳す〔＝都の大路を、砂ぼこりを上げて軽快に車が走る〕」と（いう詩句を）思い出す。（院のお車は）待賢門から（内裏へ）お入りになる。（院が、花が散ってしまっていないかと）気が気ではなさそうにお思いになっているので、（内裏の中の）置路も遠い感じがして、（供奉の人々の）靴音もせわしい感じである。院が（内裏に）お出ましになるのを見て、言うまでもなく女房たちがいっせいに慌てて逃げていくのを、（院が）「引き止めよ」とおっしゃるので、（私が）参って（女房に）言葉をかける。「花（のように美しい方々）であるならば、しばらく立ち去らないでおくれ、桜の木のもとを」、（こんなふうに私が）思いつくままに指図がましく申し上げたところ、（女房は）「（口のない花のように）黙っているのでは仕方がないだろうよ」と言っ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

て、山吹を持っていたのを（私に）下さった。

そうして（院は）桜の花の下に人々をそば近くお呼び寄せになって、「（桜の花は）すっかり残り少なくなってしまったのだなあ」とおっしゃって、硯や紙などをお取り寄せになる。それぞれ歌をお詠み申し上げよとのことをお命じになると、人々に紙々を分けてお与えになる。桜の花を一枝折って、紙をのせる台にして、それぞれ歌を添える。その折の（院の）お詠みになった歌は、

天つ風…＝空を吹く風よ、しばらく吹いて閉ざしてくれ。この桜の花が雪のように入り乱れて散る雲の中の帰り道を。

お帰りになった時に、散っている花を硯の蓋にかき集めて、摂政殿へ差し上げなさったのに添えなさった（歌は）、

今日だにも…＝（明日にならなくても）今日でさえも庭（の地面の上）を花盛りとでもいうように散る桜の花を、（雪ではないので）消えずにあるとしても、雪なのかとでも思って見ておくれ。

（院が私に）この花を持たせて、（摂政殿のいる）三条坊門に行かせなさったので、（私は）参上する。（三条坊門では）「たった今、（摂政殿が）院のもとへ参上なさる」ということで、御前駆や御随身が、庭に立ち並んでいましたが、（私はその人々を）かき分けて参上してこのことを仲資朝臣を介して（摂政殿に）申し上げましたところ、（摂政殿が）出ておいでになって、ご自身でお受け取りになる。（摂政殿から院への）ご返歌は、

誘はれぬ…＝花見に誘われなかった私のために消え残ったのだろうか。明日になる前の今日のこの花の白雪は。

と、聞きました。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〔重要単語〕

○やがて…①**そのまま**。　②**すぐに**。

○みゆき【行幸】…**天皇のお出かけ**。

【御幸】…院・上皇・女院などのお出かけ。

○はらから…兄弟姉妹。

○ぐす【具す】…①備わる。　②**一緒に行く**。　③夫婦となる。

○あだ【徒】…①**浮気なさま**。　②はかないさま。　③むだなさま。

○かしこし【畏し・恐し】…①恐ろしい。　②**恐れ多い**。

【賢し】…①利口である。　②非常に。

○げに【実に】…①現実に。**なるほど**。　②**ほんとうに**。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第二講　解答解説

〔解説〕

① 『とはずがたり』は鎌倉後期の作品。『新古今和歌集』は鎌倉初期に成立。本来の設問では選択肢に『伊勢物語』もあり、正解を二つ選ばせる設問であった。

② 消去法を使ってでも確実に解けてほしい文学史。『落窪物語』は『源氏物語』よりも**前**に成立していることがポイント。選択肢ロの『狭衣物語』は『源氏物語』よりも**後**に成立した作品。『風姿花伝』は、室町時代の世阿弥(ぜあみ)の能楽論書。『無名草子』は、鎌倉前期の物語評論。よって、正解はイ。①同様、選択肢に『日本霊異記』もあり、正解を二つ選ばせる設問であった。

③ 「引き歌」は引用以外の部分が特に大事。この設問では、引用外の重要単語「あだ」がポイント。「あだ」は「浮気なさま」。よって、正解はハ。

④ 「具す」は重要単語。「一緒に行く、引きつれる」の意味。よって、正解はニ。

⑤ 「行幸」も重要単語。「帝・天皇のお出かけ」の意味。よって、正解はロ。

〔解答〕

① ホ　② イ　③ ハ　④ ニ　⑤ ロ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。